
チート的な・・・の話

幻夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートのな・・・の話

【Nコード】

N5723T

【作者名】

幻 夢

【あらすじ】

戸宮 鈴菜は家族で中学受験合格を悲願しに初詣に出かけた。神社裏の森が気になって鈴菜は、母に少しの自由行動を許可してもらい森に入った。しかし偶然そこにいた神様を見て鈴菜は驚き崖で足を滑らせ死亡した。気がつけば真っ白な空間で、死ぬ予定は無かったと神様に謝られる……。不定期更新です。

大体の流れは変わってませんが、一回書き直しました。

1 偶然

私は家族で中学受験合格を悲願しに初詣に出かけた。

行く途中に神社裏に森が見え、興味本位でちょっと入ってみたくなつた。

家族で賽銭箱の前に行き、五円玉を入れて合格のお祈りをする。

「合格するといいわね」

お母さんがそう言つて私の頭を撫でた。

「お母さん私ちょっと見て回つて来ていい？」

そう言つて私はお母さんを見上げる。

「ええ、でもちよつとだけよ。」

にっこり笑つて私に言う。

お母さんから許可をもらったので、さっそく私は森に向かった。

森に入ってみるといろんな植物と虫がいた。

少し不思議な感じのする綺麗な景色を眺め、わくわくしながら森

を進む。

私は自然を見ていると、とても不思議な気持ちになるから好きだ。そう言えば夢中になって気がつかなかったが、もうかなり時間が経っている気がする。

私ははっとして空を見上げる。

空が赤く色好き、暗くなりだしていた。

やばいと思って帰ろうとするが道が分からない。

「どっしょっ……」

完全に迷ってしまったこの状況に途方にくれる。

とりあえず人がいないか探してみる。

「誰かいませんかー」

しかし人は一向に現れず、あたりはもう完全に真っ暗になった。

そんな時突然遠くから足音が聞こえた。

私は急いで足音のする方え向かう。

段々懐中電灯か何かの光が見えてきて、人にやっと会える事が嬉しくて泣きそうになる。

少しずつ人の影が見えてくる。

「すみませーん!!!」

人がこちらを振り返った。

見えたのは人とは思えないほど青白い顔の老人が、目を全開に見開き白い服を着ていた。

まさか幽霊にこんなところで合うなんて思わなかった。

驚き思わず体制を崩してしまった。

「えっ」

体が倒れてそのまま坂を勢い良く転がっていく。

そして一瞬体が浮き意識が途切れた。

2 転生

目を開けると私は真っ白な空間に立っていた。

確かさつきお化けを見て……死んだ？

一瞬悪い夢かと現実逃避したが、夢にしてはやけにリアルで意識もはつきりしていた。

でも死んだなら此処は何処なのだろうか。

「此処は死後の世界と言いたい所じゃが、お前さんはちと特殊で
う……………」

突然背後から声がして驚いて後ろを振り向くと、あのお化けが立っていた。

「お化けじゃない神様じゃ……！」

神様はすぐに訂正を入れた、神様だったのか気づかなかった。

それにしても心読めるのかな神様って。

「読めるぞ……とそろそろ話を進めるかの……」

どうやら本当に読めるらしい、そう言えばさつき私の事を特殊だ

と言ったけど、どうゆう事だろう。

「実はお前さんは死ぬ予定が無かったんじゃないよ……」

「どう言う事ですか？」

予定とかあるのは嫌だなと思いつつ神様にたずねる。

「わしが世界に丁度降り立った所にお主が来て、わしを見て驚いてお主は死んだじゃろ。本当の予定ではお主は

わしとは会わずに、家族に見つけられて家に帰るはずじゃった」

なんとなく話が見えた気がする。

私の死は規格外だからちょっと特殊だと言ったのか。

「そうじゃ……それでお主に転生してもらおうと思ってるの、少しなら条件も付けられるが」

転生すると言われ少し戸惑う。

「じゃあまず一つ目記憶の引継ぎをお願いします。二つ目異世界がいい。最後に三つ目私が生きていた世界から私に関する記録を消してください」

言い終わると私はふうと息をついた。

「三つ目のは本当にいいのか……」

もしあのまま私が死んだことになれば、家族の皆が悲しむだろう。

忘れられるのは辛い。悲しんで欲しくない。

ここに家族がいたら何を言っているんだと怒られるかな……。

異世界が良いって言うのは保険みたいなもので、私の事を完全に忘れた家族にもしも会ったら辛いから。

そしてこれはもう決めたことだ。

「はい」

「そうか……それでは転生してもらおうかの」

そうして私の意識は途切れた。

3 生まれは公爵令嬢

「あーあぎゃーっ!!!(転生したのかな?)」

「女の子ですよ奥様!」

「まあ、生まれたのね」

しばらくして段々目が開けるようになった。

前を見つめるとすごい美人な金髪蒼眼の女の人っていて、愛おしそ
うに見つめてくる。

この人が私のお母さんかな?

「生まれたのか?!」

部屋に勢い良く扉を開けて、私のお父さんとお兄さんと思われる
人が入って来た。

どちらもこれまたすごい美形だった。

見た目はお父さんが茶色の髪に赤い目をしていて、お兄さんの方
が金髪に紫の目をしていた。

「僕今日からお兄ちゃんだね」

「貴方にそっくりね」

「いや君に似て可愛らしいな」

目の前でなんだかとても盛り上がっていた。

なんだか父と母を見ていると、バカップルを見ているような感じだ。

あれから十年たった。

私の見た目は母譲りの金髪に父譲りの赤い目をしている。

最初は舌が回らなくてちゃんと話せなかつたので、言いたいことがうまく言えなかつたが家族の人達はすぐに分かってくれた。

所で私の現在の名前はベアトリーチェ・ベッティネッリと言って公爵令嬢と言う事が分かった。

ちなみに家族の名前は母父兄の順番で左からファティナ、エリック、ルシファーと言う名前だ。

「リーチエ様!!」

母の侍女のルイの悲鳴とともに、私は変装をして屋敷を抜け出した……。

4きっかけ

今日も私は公爵令嬢とは思えないような格好で過ごす。

さらに言ってしまうえば、屋敷から抜け出すたびに男装だっ
ている。

まだ社交界に私は出たことが無いけれど、たまに屋敷を訪れてく
る連中を見ると、社交界には行きたくないなんて考えてしまっ
た。

しかし私も令嬢、ましてや公爵家だ。

二日に一回のペースで、私は屋敷を抜け出し町へ遊びに行く。

町の子供たちに混ざって泥んこになって遊んだり。

いろんな店を回ったりして、町に出かけるのは楽しい。

今日もそんなふうに町を回って帰ってきた。

屋敷に入って直ぐに私はルイに捕まる。

「リーチェ様！また町に行かれたのですか！？」

彼女は私が生まれたときから使用人をしていて、私にとって姉の

ような人だ。

ただいつもいつも私がする事を、怒りながら説教されるから気分が良くない。

「別に私が行きたいから行っただけ……」

そう言っただけで見せると、ルイは苦しそうに顔を歪める。

「貴方は御自分せいで、奥様がどんな風に言われているのかわからないから……取りあえず着替えてください。今日はお客様も来ているのでちゃんと来てくださいね……」

お母様が何だと言っただろう？

ルイに体を洗ってからドレスに着替えさせられる。

髪は下ろして薄い桃色のシンプルドレスを着ている。

さすがに人が来ているときは、私もこう言う格好をしなければならぬ。

廊下を歩いていると母と祖母の話し声が聞こえてきた。

客とは祖母の事だろう、

ただ祖母が一方的に怒鳴っているような感じがした。

祖母はとても厳しい人で、私と会うとものすごく睨まれる。

少し気になって、此処からだともまだ何を言っているのか分からないので、扉の前に近づき耳を澄ませる。

「貴方はいったいあの子に何を教えていらっしやるのかしら？」

私の話……自分のことだと知りリーチエは固まる。

「まったく親が親なら子も子よね!！」

母わなにも答えないでただ黙っていた。

「失礼するわ」

扉から出て来た祖母と目が合い、凄い形相で睨みつけられる。

そして私はその場を後にして廊下を歩き出した。

ルイに会いさっきの事を聞いた。

「ルイ……お母様がつつ私のせいで」

気がつけば無意識に私は泣いていた。

「リーチエ様……」

ルイは悲しそうな顔をして私を見た。

私は泣いてるのが恥ずかしくなって急いで部屋に戻った。

自分のせいで母が酷い事を言われているだなんて知らなかった。

いつもあつたら怒りながらも、母は笑っていたから気づかなかつた。

私はめんどくさい事から逃げていただけだ。

私はこの出来事がきっかけで、祖母も文句言えないような立派な令嬢になる事を決意した。

……。
だけどやりたい事はやって公爵家に縛られるつもりは無いけれど

そして私はにっこり笑って呟いた。

「立派な令嬢計画成功させて見せます！」

リーチエに一見笑っているようなその目には、確かに揺らがない意志の強さがあった。

5 結果

あれから五年たったが、計画の結果は成功だった。

『チート令嬢』 『秘密の令嬢』 と言つ二つ名が付く位には。

リーチエは完璧な令嬢を演じて見せた。

でもだからと言って自分の意思を曲げる事は無い。

いつかこの家から抜け出して夢をかなえるのだ。

それは世界中を見て回る冒険者になる事。

だからそれまでは私は、自分の役目を完璧に演じてみせる。

私がこの五年間屋敷におとなしく引きこもっている間、私はやれる事はすべて挑戦した。

二年前祖母に会ったときに完璧に挨拶して見せたら。

とても驚いた顔をしていた。

もうこの時点で私の計画は成功した。

五年間の間にエミリー・フレスト　と言う子と友達になった。

エミリーは私の侍女でもあって私の兄ルシファアとも仲が良い。

そして明後日は入学式だ。

学院は十五から五十歳までの人が入学でき、せっかくなので学院に三人で同時に入学することになったのだ。

私は明後日の事を考えると、楽しみで仕方が無かった。

「リーチエ様学院楽しみですね」

エミリーがやってきて私に話しかける。

「うん。とっても楽しみ」

そう言うと私は自然と口に笑みが浮かんだ。

「リーチエ学院楽しみだね！」

がちや扉が開き私の兄ルシファアが、満面の笑みで入って抱きついてくる。

「ルシファア様？リーチエ様からいい加減離れやがれ！！シスコン野郎……」

エミリーが怖いくらいニコニコしながら、ルシファアを私から引き離した。

「グフッ」

エミリーニコニコしながら、リーチェに見えないようにルシファアの腹を蹴る。

「あれ……兄様いきなりどうしたの？」

気絶しているルシファアの変わりにエミリーが答える。

「大丈夫です。これは私が運んどきますから」

「え、でも一人じゃ」

「運んどきますから」

もう一度エミリーが笑顔で言った。

「うん……ありがとう」

良く分からないが、有無を言わせない感じがした。

「それでは失礼します」

そう言って肩にルシファアを担いで、エミリーはリーチェの部屋を後にした。

今さっきの様な事が今までに何度かあったが、リーチェはやっぱりと思う。

「二人とも仲いいな」

リーチエはまた今日も、そんな事を考えるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5723t/>

チート的な・・・の話

2011年9月3日12時18分発行